

各セッションの事例

1. 探究活動プレゼンテーション

SDGs に関するテーマとし、更に以下(オ)～(キ)のいずれか（複数も可）に該当するテーマを対象とします。探究活動の成果が出ていなくても、探究活動の目標と研究方法が示せるものであれば途中のものでも発表可能とします。

(オ) 当該テーマに関する情報収集が行われている

(カ) 海外や国内にいる外国人との交流に取り組んでいる

(キ) SDGs に関連する領域において、自分たちにできることについて考察されている

(オ) 当該テーマに関する情報収集が行われている

新型コロナウイルスの影響により、他の地域や他国に赴き、情報収集を行うことが困難な状況です。従来の探究甲子園では、現地への訪問や当事者への直接的なヒアリング等による情報収集を重視していましたが、昨年度に引き続き今年度についても情報収集の方法と内容を柔軟に捉えています。文献調査やオンラインツールを活用した情報収集等も対象となります。以下は、(オ)の条件に該当する探究活動の事例です。

例1：1990年以降の日本のエネルギー問題への対策とアジア諸国がとってきた対策に関する情報を Web ページや研究論文等を用いて収集し、比較表を作成した。そこから、日本の環境問題の課題について考察した。(Goal7)

例2：親世代は日々の仕事においてどのような「働きがい」を感じているのかを調査するために、同学年の同級生の保護者計 356 名を対象に Web で質問紙調査を行った。また、OECD の調査結果を用いて先進諸国との比較を行った。(Goal8)

(カ) 海外や国内にいる外国人との交流に取り組んでいる

現地訪問が新型コロナウイルスの影響により困難になっています。本年度も、海外だけでなく国内にいる外国人との交流活動を通じた学びを発表していただくことができます。対面での交流のみならず、オンライン会議システム等を使った同期型の交流や、オンライン掲示板等を用いた交流も対象に含まれます。以下は、(カ)の条件に該当する探究活動の事例です。

例1：オンライン会議システムを用いて、米国とスウェーデンの学校と月に1度テレビ会議を行った。そこでは、各国の新型コロナウイルスの被害状況と医療体制、政府による対策について報告しあい、共通点と相違点を議論した。(Goal3)

例2：オンライン上で交流協定を結んでいる韓国の高校と協働でWikiを制作した。
テーマを「ジェンダー問題」とし、議論を重ねながらジェンダー問題に関する
キーワード1つひとつについて丁寧に定義付けをしていった。その際、双方の
国の実際に起こった事例を紹介するなどの工夫をした。(Goal5)

(キ) SDGsに関連する領域において、自分たちにできることについて考察されている

SDGsに関連する諸問題について、「自分たち」と「出来ること」をキーワードに考察
された知見を公表してください。当該テーマに関する情報収集は必要ですが、その中
でも特に「出来ること」は「何故できると考えるのか」という根拠をもって論じるよ
う心掛けてください。尚、実際にそれが出来るのかどうかを検証する必要はありませ
ん。以下は、(キ)の条件に該当する探究活動の事例です。

例1：学校の給食以外で、十分な食事を取ることができない児童が自分たちの地域に
多数いることを知った。そこで、地域の公立小学校で廃棄処分になっている食
料の詳細を量・質ともに調査を行った。それら廃棄処分になった食料をどのよ
うな経路で集め、どのような体制で運営することで給食以外で十分な食事を取
ることのできない児童たちに無駄なく提供することができるのか、アクション
プランを作成した。(Goal2)

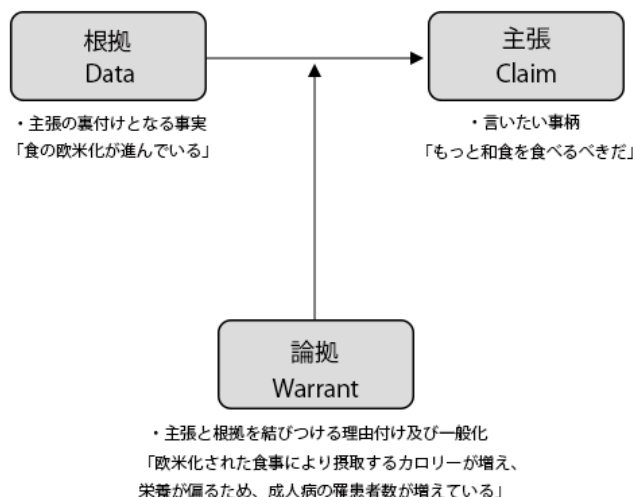
例2：地域の海岸に溜まったゴミを完全に無くすためには、どれくらいの人手や経費
が必要になるのかを計算した。1週間の清掃活動にかかった人数と時間、備品
代金をデータ化し、1カ月間海岸に一切ゴミがない状態を維持するためのプラ
ンを作成した。(Goal14)

P.3 II.グループディスカッション に続く

II. グループディスカッション

【事例】日本の学校における9月入学化の課題と解決（2016年度テーマより）

ラウンドテーブル型のディスカッションでは、ディスカッション前に個人で情報を収集して主張・根拠・論拠を整備する準備期間と、ディスカッション中に集団としての主張・根拠・論拠を構築する議論の2段階が存在する。よって以下に、個人と集団の二つの場合で主張・根拠・論拠の例示を行う。主張・根拠・論拠の関係性は下図のとおりとする。



Toulminの三角ロジック

<個人>

- 9月入学制を導入すると、卒業後入学までのギャップタームが生まれる。このためセメスター制やクォーター制を導入してギャップタームを小さくすることが必要だ。こうした制度は高校から大学だけでなく、高校や中学、小学校へも広げていくべきだ。
- (1) 主張：小中高大でセメスター制もしくはクォーター制を導入すべきである
- (2) 根拠：日本の制度では、ギャップタームが存在するから
- (3) 論拠：なし
- (4) この例では、日本の制度で大学入学に9月入学を導入するとギャップタームが生まれることは正しい根拠であると言える。しかし、このギャップタームをなぜ短縮しなければならないか、という点については言及されていない。ギャップタームがあることによつてどのようなデメリットがあるのか（あるいはメリットはないのか）を、データを元に証明することでギャップタームを小さくする必要性があることの論拠となる。ギャップタームをなぜ短縮しなければならないのか（論拠）が欠けているために、ギャップタームがある（根拠）→ギャップタームの縮小のための制度が必要（主張）に説得力がない。

- 現在、日本に留学している留学生で一番多いのは中国からで、およそ 10 万人いると言われているがそれ以外の地域からの留学生は少ない。9 月入学制を導入するのは、優秀な学生を獲得したい・あるいは日本国内の学生を国外に留学しやすくして国際化を測るという側面があると思うが、中国以外のアジア地域の留学生は 9 月入学で獲得することは難しいと思う。これには例えば日本語が難しいという問題などもあるが、それ以外に、学費の問題がある。日本の学費は高く、また、OECD の 2013 年のデータでは、返済が不要な奨学金の制度を設けている大学は 0.6%しかない。だから、9 月入学制を導入するよりも、貧困者層への奨学金制度の整備や語学教育に力を入れるべきだ。
- (1) 主張：9 月入学ではなく、貧困対策や語学教育に力を入れるべきである
- (2) 根拠：中国以外のアジア地域からの留学生が少ない
- (3) 論拠：日本の学費は高く、OECD のデータからも奨学金が返済不要な大学が少ない
- (4) 根拠と論拠、および主張の関係性は必要な条件を満たしている。ただし、論拠となるデータは実際の OECD が発表しているデータと異なっており、根拠に虚構が混じっている。ディスカッションでは、自分の根拠・論拠となる証拠データを何から得たのか、どのような数値であったのかの資料を持ってくることを推奨する。また、この例の場合、主張の方向性を誤っている。例示のディスカッションでは「9 月入学制の課題と解決」を話し合う必要があるにも関わらず、この主張は、9 月入学は必要なく、別の課題を解決すべきであるとしてしまっている。これではテーマに即した議論ができず、グループでディスカッションを行う際に議論が拡散してしまう。

<集団>

集団でディスカッションする場合には、多くの場合、「司会」「司会補佐」「書記」「発表者(2名)」「タイムキーパー」の役割が各メンバーに割り振られることが多い。ディスカッション内容だけでなく、自己に割り振られた役割を認識し、集団として有意義な議論となるように留意すること。

- A「ギャップタームが出来ると、受験勉強などが終わってしまって、学生の学力低下などが起こってしまう。これを防いで様々な経験をしてもらうために、ギャップタームを埋めるために、インターンシップをギャップタームの存在する全員に課すことはどうでしょうか?」、B「インターンシップについては、海外の例では、インターンシップが広まると、インターンシップに参加していないと就職が難しくなったりするといった問題がある。また、インターンシップは、基本的にお金をもらえないので、貧困者層では、学費の問題が出てしまう」

【A】の論述

- (1) 主張：ギャップターム期間のインターンシップ参加の義務化
- (2) 根拠：ギャップタームによる学力低下
- (3) 論拠：受験勉強の終了（この論拠は弱い。9 月の入学者の受験期間を 4 月入学者と同義と考えているし、受験勉強と学力を直接結びつけることができるかは証明できていない）

【B】の反駁

- (1) 主張：インターンシップは効果がない
- (2) 根拠：インターンシップに参加していない学生に不利である
- (3) 論拠：海外ではインターンシップに参加していない
- (4) Bの反駁は、実際にはAの論述のどの項目にも対応していない。Bの反駁の根拠となる「インターンシップに参加していない学生には不利である」は、Aの「主張」に対しての問題を提起しているが、Aの論述ではインターンシップを全員に課することを前提としているために、インターンシップに参加していない学生の話を持ち出すことは反駁になっていない。また貧困者層に関する反駁は、Aの論述に存在しない新たな問題提起である。

以 上